

平成 29 年度 大阪市立大学地理学教室 卒論・修論発表会 プログラム

< 卒論発表 >

- 13:00 奈良県高取町における菓産業の変遷 尾本 由菜
- 13:20 静岡県磐田市における別珍・コーデュロイ織物産業の社会的分業体制の変容 森南 直汰
- 13:40 大阪市大正区のまちづくり事業実態から見る地域資源としての企業の可能性と自治体の役割
梶本 千尋
- 14:00 地域資源としての横浜山手西洋館－歴史的建造物の活用とコミュニティー 大畑 恭子
- 14:20 ピースツーリズムが日本のツーリズムに与える展望 大西 実里
- 休憩 (14:40～15:00)
- 15:00 日本統治期の朝鮮半島における治水事業と土木行政組織 大谷 真樹
- 15:20 大阪市における学校選択制の実態
－学校選択制は学校・家庭・地域社会の連携を崩壊させるか－ 中西 広大
- 15:40 障害者福祉施設が地域社会において果たす役割
－設立の経緯と掲げる社会的ミッションに注目して－ 千原 佐和
- 16:00 食品ロス再流通システムの実態と食支援を通じた連携
－フードバンク関西を実例に－ 鈴木 まゆ
- 休憩 (16:20～16:40)

< 修論発表 >

- 16:40 ロンドンの移民・貧困・インナーシティの都市社会地理
－ランベス区とブリクストン地区の“論点化”を軸として－ 松尾 卓磨

平成 29 年度 卒業論文/修士論文題目・要旨

<卒業論文>

奈良県高取町における薬産業の変遷

尾本 由茉

奈良県では古くから「大和売薬」が有名で、その中でも高取町はかつてその製薬地帯として、また「大和の薬売り」の本場として一つの中心部を形成していた。本稿の目的は、大和売薬の起源から現在までの変遷と、その中でその変遷や法律の制定が奈良の薬産業にどのように影響したのかを明らかにし、今後の高取町をはじめとする奈良県の薬産業の展望を考察することである。大和売薬は配置薬業を中心として、現在まで古い歴史を育んできた。奈良の薬産業は現在衰退の兆しを見せてはいるものの、セルフメディケーションを推進する時代のニーズに合わせる事や、他地域との差別化などの対策を図ることで、今後も長く人々の健康の一助となっていくことだろう。

静岡県磐田市における別珍・コーデュロイ織物産業の社会的分業体制の変容

森南 直汰

静岡県磐田市は別珍・コーデュロイ織物生産の国内シェア95%以上を誇る国内で唯一の別珍・コーデュロイ織物産地である。本稿の目的は、当産地の社会的分業体制を時系列的に明らかにすることである。当産地は縮小基調にあり、それに伴って生産調整役を担っていた機屋の消滅や、一部の生産工程における分業体制の消失等、社会的分業体制に変容がみられた。今後も産地存続のために分業構造を変化していくことが見込まれる。

大阪市大正区のまちづくり事業実態から見る地域資源としての企業の可能性と自治体の役割

梶本 千尋

本論文では大阪市大正区で行われているまちづくり事業の実態把握から、地域資源としての企業の可能性と自治体の役割について考察する。聞き取り調査を通して、企業は事業に参加することでまちづくりの担い手となりながら、普段接することのない区民や学生、他企業と交流の場を持つことで様々な点で企業活性化につながっていることが明らかとなった。区役所は自治体の中で最も企業に近い存在であるという強みを活かして企業と共に事業を進めることが今後重要になる。

地域資源としての横浜山手西洋館—歴史的建造物の活用とコミュニティ—

大畑 恭子

横浜山手は、開港期に外国人居留地として栄え、現在も山手西洋館をはじめとする歴史的建造物が立ち並ぶ住宅街である。近年観光地としても注目されているが、観光化にあたり行政と住民間での対立は見られず、これは官民協働のまちづくりの下で観光化が進んだことが要因である。本稿では、横浜山手及び山手西洋館をめぐる行政、施設の指定管理者、地域住民、観光客の四者の繋がりを明らかにし、各々の立場から見る横浜山手の在り方と今後の課題について考察を行った。

ピースツーリズムが日本のツーリズムに与える展望

大西 実里

ピースツーリズム推進事業とは、広島市が2017年度から計画を始めた平和・観光施策である。本稿は、広島市のピースツーリズムを調査することで、行き詰るダークツーリズムに取って代わる、悲劇の歴史や平和を対象としたツーリズムの在り方を探る。懇談会会議や聞き取りから分かったピースツーリズムは、「着地型観光」「独自性」「教育的要素」「交流型」などの特徴を持ち、今後のツーリズムの在り方に新たな展望を与える事業となり得ることが示された。

日本統治期の朝鮮半島における治水事業と土木行政組織

大谷 真樹

日韓併合以来、朝鮮半島では朝鮮総督府によって河川改修を中心とする治水事業が行われてきた。本稿では、河川の持つ資源としての側面と、民心涵養のための装置という側面を明らかにすることが目的である。日本から見た朝鮮の河川の特殊性、土木行政を実行した担当部署の変遷、そして朝鮮総督府の治水事業で指定された河川の選定理由に着目し、先行研究に不十分な図を多用し分析した。

大阪市における学校選択制の実態—学校選択制は学校・家庭・地域社会の連携を崩壊させるか—

中西 広大

本研究では大阪市の学校選択制が、学校・家庭・地域社会の連携に与えている影響を明らかにする。学校選択制についての議論の中で想定されている効果や懸念事項を実際に起こっている現象と照らし合わせながら考察する。調査の結果、学校選択制導入時に想定された選択行動は行われてはいることが明らかになった。学校は地域の中で連携の核を担っており、統廃合も含めた学校の再編は地域の実態を踏まえた慎重な議論が必要であろう。

障害者福祉施設が地域社会において果たす役割—設立の経緯と掲げる社会的ミッションに注目して—

千原 佐和

近年、共生社会が謳われるようになる中、障害者福祉施設は直接的な支援を超えた役割を果たすようになってきている。本研究では、障害者福祉施設の地域社会に対する参入方法や機能という観点から、施設設立の経緯や組織の性質、掲げる社会的ミッションを明らかにし、障害者福祉施設の場としての多様な役割を考察する。大阪市の事例から、障害者と健常者とのインフォーマルなつながりからは共に働く場が生まれ、他事業から転換した社会福祉法人は地域のニーズに合わせて事業展開を行うことが分かった。また、親の会が続く施設では地域に開くことを意識していることが分かった。

食品ロス再流通システムの実態と食支援を通じた連携—フードバンク関西を実例に—

鈴木 まゆ

フードバンク活動とは、食支援が必要な人の元へ食品ロスを無償で届ける活動のことを指す。本稿の目的は、食品ロスを再流通させる仕組みの明確化とフードバンク活動の実態を明らかにすることである。食品ロス発生と再流通の経路パターンは多様であり、また、食品の期限という時間的制約や提供先企業の存在が配荷エリアに影響を与えることが分かった。食支援を充実させるためには、全国のフードバンク同士の連携に加え、官民連携、受け取り団体同士の繋がりといった綿密なネットワークを構築する必要があると考える

以上9篇

< 修士論文 >

ロンドンの移民・貧困・インナーシティの都市社会地理—ランベス区とブリクストン地区の“論点化”を軸として—

松尾 卓磨

本稿では特定地域の特徴的側面について現況と歴史的変遷の両面から詳細に把握している。そして、そこから得られた知見や導き出した見解をもとに特定地域を“論点化”、すなわち、その地域を社会的・学術的議論の対象として多角的に対象化しようという1つの可能性の提示を試みている。今回研究対象としたのは英国ロンドンのランベス区とその中央部に位置するブリクストン地区である。19世紀末から現在を時間軸として地域変容と現況把握を行った結果、両地域は貧困問題の集中と黒人系住民の集住（＝“貧困と「Black」の地域的重複”）が共にみられる地域であるということを示すことができた。また、特にブリクストン地区はかつてロンドンを代表するインナーシティであり、1980年代には暴動の発生地でもあったが、現在は“ジェントリフィケーションの典型地”となっている。貧困とエスニシティの関連性、多様な地域変容を淵源とする現在の空間的・社会的多様性等、両地域は様々な側面から“論点化”が可能な地域であると言える。

以上1篇